26年に中等教育部が開設 シンガポール名門校を手本に 世界で活躍できる グローバル人材を育成

100年を超える歴史を持つ伝統校の明星学苑に、2026年4月より新たに「明星Institution中等教育部」が開設する。明星学苑が培ってきた「実践躬行（きゅうこう）」の精神に先進的なグローバル教育を組み合わせ、世界で活躍できるリーダーの育成を目指す。具体的な構想について、校長の井上一紀先生に伺った。

明星Institution中等教育部
井上 一紀 校長

グローバルな感覚が〝当たり前〟に根づく学校へ

2026年4月に開設を迎える明星Institution中等教育部は、多摩地域という豊かな自然環境を拠点としながら、世界で活躍できる次世代のリーダーの育成を目指す。

校長の井上一紀先生は、1983年から渋谷教育学園幕張中学校・高等学校に勤務し、渋谷幕張シンガポール校（現・早稲田大学系属早稲田渋谷シンガポール校）で長らく教頭を務めてきた、グローバル教育のエキスパートだ。国内外の生徒たちと関わってきた経験を生かし、明星学苑で継承されてきた「実践躬行」の精神と、グローバル教育の先進性を融合させていくという。

「シンガポールの生徒たちは、グローバルという言葉を意識していません。海外大学に進学するのは当たり前で、外国語を話すことに対しても抵抗がありません。本校においても、グローバルな感覚が〝当たり前〟のように根づいているという状態に到達したいと考えています」

明星Institutionという校名も、シンガポールでの経験が由来だと井上先生は説明する。「シンガポール時代に深い親交を持った学校である、ラッフルズ・インスティテューション（Raffles Institution／RI）が校名の元となっています。RIは、イギリスのオックスブリッジやアメリカのアイビーリーグなど、世界トップレベルの大学に多くの合格者を輩出している名門校です。同校のように、民族の違いにとらわれない多文化共生の精神を持ち、世界を舞台に活躍できる人材の育成を実現しようという志から、この校名がつけられました」

一般生と国際生が共に学び生きた英語に日常的に触れる

志を実現するうえで同校が意識しているのが、国際性、指導力、先見性、知的好奇心、主体性の育成だ。その第一段階として、70名の募集定員のうち、10名分を帰国生や英語力の高い国際生に割り当てて積極的に受け入れていく。

教員も、ネイティブスピーカーをはじめ、国際教育に携わった経験豊富な人材を数多く採用している。

「帰国生と国際生の授業は、基本的にすべて英語で実施します。ネイティブの先生はもちろん、アメリカの大学で指導していた日本人の先生も加えて、少人数の生徒を対象にきめ細かい指導を行います。日本語が心配だという帰国生に対しては、補習や個別指導などで対応していく予定です」

天体観測ドーム「スタードーム」。星の自動追尾システムなど、最新機能を搭載した望遠鏡を備える

蔵書数8万5000冊を誇る図書館。そのうち約1万8000冊は洋書だ

クラス構成は、一般生と帰国生・国際生であえて分けず、行事やクラブ活動を一緒に行う。一般生にとっては帰国生などとの交流を通して、日常的に生きた英語に触れることができ、さまざまな国の文化も学ぶことができる環境だ。一般生の英会話の授業もネイティブ教員が担当するため、英語の力を大きく伸ばしながら、グローバルな感性を磨いていくことが可能だ。

「一般生・国際生にかかわらず、英語はもちろん算・国・理・社の授業もしっかりと行います。あくまでも目標は、東京大学や京都大学といった難関国公立大学への進学。3教科受験を前提とはしておらず、文系を選択しても数学・理科の授業は必須となります」と井上先生。中高6年間を2年ずつに区切り、成長段階に合わせた指導を行う「3ブロック制」と、授業内容や学習目標を明確化した「MIシラバス」を組み合わせて、計画的に学力を伸ばしていく。

さらに同校では、グローバルな感性を養う多彩なプログラムを準備している。たとえば、国際理解教育として、中3全員が参加する海外研修や、中3～高2の希望者を対象とした海外研修プログラムなどを通して、現地の人々と交流し、多様な価値観に触れる機会を提供していく。

第二外国語講座も設ける予定だ。中3～高2を対象に、話者人口の多い中国語や、フランス語、ドイツ語など、複数の講座から生徒が興味に応じて自由に選択できるようにするという。

芸術を通して、世界と日本の文化に親しむ芸術講座も開催する。生徒たちは歌舞伎などの日本古典や、交響楽コンサート、オペラの鑑賞を通して、豊かな感性を磨いていく。

そのほかにも、好きなテーマを選んで論文を書く「自主研究論文作成」、外部講師による進路講演会、海外大学進学説明会など、多様なプログラムの準備が着々と進められている。

「海外大学への進学では、専門性を持つ教員のサポートが必須です。専門の進路カウンセラーを配置し、高1からTOEFL®やSAT対策、エッセイ指導など、海外大学に特化した受験サポートを行います」と井上先生。生徒たちの夢を後押しするキャリアサポートの準備にも、一切の妥協はない。

キャンパス内に本物に触れられる施設が数多くそろっている点も明星学苑の強みだ。

たとえば、図書館は8万5000冊を所蔵しており、洋書も1万冊以上そろう。三つの体育館に加えて、温水プールや武道館、テニスコートも完備している。さらに、最新機器を備えたスタードーム（天体観測ドーム）など、生徒たちの興味・関心を刺激し、学ぶ意欲を高める環境が整っている。

明星大学の施設も利用することができ、東京農工大学や東京経済大学といった外部の大学との連携も積極的に行っていくという。

失敗を積み重ねて人間力を身につけてほしい

井上先生は、世界で活躍するためには「人間力」が大切だと話す。

「本校では、みずからの人生を創り上げていく『自己創造力』を育成します。その土台となるのは人間力です。これは知的能力、コミュニケーション能力、自己制御力の三つの要素から成ると考えられていますが、世界で活躍するためには壁にぶつかってもくじけない『第4の人間力』も身につけなければなりません。本校でたくさんの失敗をして、それを何度も乗り越え、積み重ねる経験を将来につなげてほしいと考えています」

最後に、井上先生は受験生にメッセージを送った。

「明星学苑は100年以上前に創立された学校ですが、グローバル教育や主体性教育など、最先端の学びを常に行ってきました。ぜひ本校を訪れて、学びの様子や、生徒たちの姿をご覧になってほしいと思います」

本記事は「日経マガジン 教育特集号〈23 January 2026〉」（日本経済新聞社発行）より抜粋したものです。禁無断転載 ©日本経済新聞社